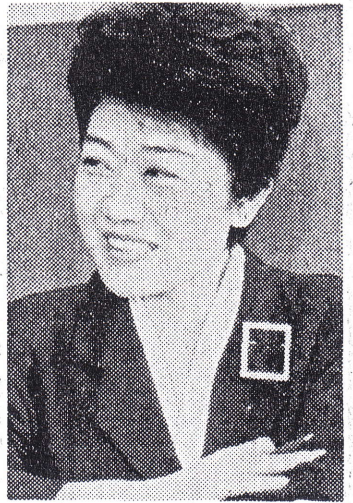




「非婚か結婚か—ぼちぼち考えよう、私の生き方」と題する集いがこのほど、岡山市津島東の市立北公民館で開かれ、フリーライターの吉広紀代子、吉田清彦氏が「非婚」「シングル」の生き方を講演、約百二十人の参加者と自由に話し合った。同公民館で五年余り女性の視点で女と男のあり方を問い直しているサークル「女性学研究会」(時岡世津子代表)が企画。研究会のメンバーも、参加者も、ほとんどが三十歳代から五十歳代の主婦で、会場には今さら「非婚」とはいかないが、従来の「結婚」を問い直し、どうすればよくなるか考へようとの熱気がいっぱいだった。吉広、吉田両氏の講演を要約、紹介しよう。



「非婚」派? 「結婚」派? 考える生き方

吉広さん

急増する自立女性

「自分の選択」を大切に

吉広紀代子さん 一九四〇年生まれ。岡山操山高、日本女子大文学部卒。報知新聞記者を経て七年からフリーライター。今年一月「非婚時代」(二書)を出版。

自立できるようになり、都市化の進展で「非婚」を否定しない精神的な土壌ができ、社会通念にとらわれずに生きるようになってきたことがある。東京で多くの「非婚」女性に接するが、彼女

一方、「非婚」の男性にインタビューすると、「女を食わせる責任を負うくらいなら自分のしたい仕事を選ぶ」と言う。私は女性が男性に対して、一方的に家事分担を要求するのはおかしい。その分、女性は自分で収入を補うか、収入減をがまんするかしらと悩む。男と女がよく話し合って同時に変わらないう。シングルへの質問で多いのは「老後と子供の問題だ。老後の安心のために結婚する人もいる。でも子供夫婦に気がねするのはいや」と同居しない高齢者が増えている。高齢者同士がともに暮らす場をつくる模索も出てくる。私自身は老後に不安を感じていない。子供を産むかどうかについては、女性は育児によって成長するし、育児以外によっても成長すると思う。出産・育児は女の選択のひとつにすぎない。それが自分に適した生き方を選べる社会をつくりたい。

女性学研究会が講演会

吉田清彦氏 一九四五年生まれ。神戸市外語大中退。現在、喫茶学校講師、飲食専門誌記者。女性問題懇話会など多数のサークル活動に参加。男女役割分担を問い直す。二度離婚し現在シングル。



120人の熱気であふれた会場—岡山市津島東の市立北公民館で

従来結婚を選ばない「非婚」と結婚予備軍の「未婚」の区別は二、三年前アメリカ社会で始まった。日本では二十歳以上の五、六割が「非婚」と推定され、この五年間に急増している。背景には女性が経済的に

三十三歳の独身男性は増えていくが、仕事が忙しく気がつけば三十歳代になっていた「フリー型」や受験競争の結果母親と離れられない「母子密着型」が多く、選択した「確信犯型」

は数多と思う。女性側は役割分担を問い直しているが、若い男性は保守化しており、男女の意識のギャップは大きい。つまり今の二十歳代の男性はそもそも結婚する資格がない。

長ととかの「役割」でしか生きていない。管理社会から距離を置き、自分の名前のできる快感を持つ。私は結婚制度から抜け出、男の働き方からは離れた。年収は百万円台だが、月のうち十日をサークル活動にあてて充実した毎日だ。

吉田さん

広がる男女の意識

「私の」結婚観こそ意義

私は結婚を体験して、結婚「制度」に疑問を持った。今の結婚は、夫や父、妻や母といった「役割」で生きることを強要

の、どちらかが相手に属するものでもない。一部重なり合うあくまでも違う二つの円だ。相手と自分を違う個性として認め、それぞれが自分を豊かにし続けることで、重なり合う部分も豊かにするのが理想だと思

今社会でも、「〇〇会社部